01 「食品安全」発刊60号

ー食品安全委員会　これまでの20年とこれからの10年ー

委員長

山本（やまもと） 茂貴（しげき）

はじめに

食品安全委員会は本年7月に設立20周年を迎え、この広報誌「食品安全」は発刊第60号を数えることとなりました。これらはひとえに、食品安全行政にご支援とご協力をいただいている皆様と本誌読者のおかげです。心より感謝申し上げます。

この10年に寄せて

ひとつ前の節目、10周年はというと、「食品安全」は第36号（2013年（平成25年）10月発行）でした。そこから振り返りましても、実にいろいろな出来事があったと思います。

この10年、牛肉や豚肉の生食の規格基準、加熱時に生じるアクリルアミド、牛海綿状脳症（BSE）国内対策の見直し、アレルゲンを含む食品（卵）など、私たちの食生活に密着した事項に関する評価を行ってきました。このほか、添加物、農薬、動物用医薬品、器具・容器包装、汚染物質等、微生物・ウイルス、かび毒・自然毒、遺伝子組換え食品等、新開発食品、肥料・飼料等、薬剤耐性菌、などの食品健康影響評価を着実に進め、設立から20年の評価実績は延べ3,000件を超えているところです。

近年では、新型コロナウイルス感染症が世界を席巻し、コロナ禍におかれた3年間ではありましたが、いち早くWeb会議システムを導入するなどして、リスク評価のあゆみを止めることなく進めてまいりました。

これからの10年へ

食品安全委員会ができてから20年、食品の安全をめぐる状況は常に変化してきました。そして世の中の変化に合わせて食品の安全を巡る問題は今後も様々な形で発生してくると考えています。そのような中で、「国民の健康保護が第一」という命題にしっかり応えることができるように、食品安全委員会のあゆみを進めていくことが重要です。

また、食品安全行政にリスクアナリシス（リスク分析）の考えが取り入れられてから20年になりますが、この考え方は確実に定着してきたと思います。重要なことは、今後の世の中と食品の安全に係る変化に対して、食品安全委員会としてどう応えていくか、過去20年の取り組みの糧を次の10年にどう生かしていくか、そのことをこの節目の年に大いに考え、今後のビジョンとして描くことと考えています。

最後に

食品安全委員会は20年の経験を経て、リスクアナリシスの枠組みの中で重要な役割を果たすことができてきていると思います。今後も食品健康影響評価を科学的根拠に基づき中立公正に行っていく所存です。

なお、現在世界的にも新しいリスク評価手法が取り入れられてきており、食品安全委員会も取り入れていくべきであると思います。また、*in silico*※手法の導入、微生物分野での予測微生物学や定量的リスク評価の取り組み、そしてデジタルトランスフォーメーションやAIなどの導入も検討していく必要があると考えています。

一方、食品安全委員会からの情報発信を含めたリスクコミュニケーションはさらに強化していくべきと考えます。また、本広報誌、Webサイト、SNS等の様々な媒体を通じた情報提供も積極的に行っていきたいと考えています。

これからも食品の安全を確保するために食品安全委員会は努力してまいります。皆様方のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

※：***in silico*（イン・シリコ）**「シリコン内（コンピュータ上）で」という意味。これまでに蓄積されたデータをもとに、化学物質の作用、安全性や有効性等をコンピューター上で予測、評価するような場合に使われる。